

写真・映画論

作品との
真摯な対峙で
感性が開かれる



三木順子 准教授
[デザイン・建築学系]

[経歴]
1996年04月- 大阪大学文学部 助手
2000年04月- 大手前大学人文科学部美術学科 講師
2002年04月- 京都工芸繊維大学 助教授
2006年11月-2008年01月 フライブルク大学（ドイツ）客員研究員（フェンボルト財団研究助成による）
2007年04月- 京都工芸繊維大学 准教授

[研究分野]
美学・芸術諸学、イメージ論、感性論、人間学



[授業概要]
写真や映画など、近現代の映像テクノロジーに基づいた芸術表現について、歴史、理論および実践を具体的に読み解します。芸術についての概念が「映像の時代」と呼ばれる20世紀以降どのように変化したのかを明らかにするとともに、その変化の意義と問題を探ることを目的としています。

19世紀の誕生以来、人々を魅了し続けてきた写真や映画。
その可能性を探るため、これまでに数々の理論的・実践的な試みがなされてきました。
この授業では、そうした歴史の中で生まれてきた作品と向き合い、写真・映画から多くの学びを得ていきます。

歴史を知ることが 未来への出発点

コロナ禍の影響により、例年とは違った静けさが漂う9月の松ヶ崎キャンパス。夏季休業の中、東1号館の教室に学生が集まり、「写真・映画論」の講義に耳を傾けていました。デザイン・建築学課程の学生を対象とした集中講義で、今期は遠隔オンデマンド、遠隔ライブ、対面授業の3つの形式を組み合わせて実施。対面授業は3密にならないようしっかり対策を取った上で実行に移されました。取材に訪れた対面授業は映画論がテーマ。大スクリーンに様々な映像、実験映画が映し出され、解説が加えられています。取り上げられたのはノーマン・マクラレン、チャールズ&レイ・イームズ、アレクサンダー・アレクセイエフなどの作品。いずれもひときわ個性を放つ作品で、この授業の醍醐味となっています。

「授業で紹介する映像資料は、一部インターネットでも見られますが、一般には公開されていないものがほとんどです」と話すのは、担当教員である三木順子先生。写真を専門とする市川靖史先生とともに、十数年にわたって写真・映画論の担当をしています。この授業の狙いについて、先生はこう語ります。「写真や映像の制作技術や技法については、実習で学んでもらいます。実習ではない座学であるこの講義は、そもそも写真・映像がどのような特徴を持ったメディアなのか、時代による変遷と誕生の経緯を歴史的に振り返るとともに、これから可能性を学生と考えていくことを目的としています。歴史と未来がつながる例について、先生は次のような話をしてくれました。

「今ではみんながスマートフォンで手軽に写真や映像を撮り、自分で編集するようになりました。そうした状況のもと注目されているのが、アマチュアの人々が撮りためた映像の将来的な行方です。持ち主が亡くなった後、プロの作品ではない写真・映像がどうアーカイブされ活用されるのかはまだ定まっておらず、今後議論が進んでいく予想されます。こうした問題が生まれたのはスマートフォンという新しいデバイスが出てきたからだと見なされがちです。でも、本当にそうでしょうか。実は、紙媒体の写真でも、撮影者がわからないものはたくさん残っています。そう考えるならば、現在において明るみにてきた問題でも、すでに過去の時

代にその萌芽が現れていることに気付くでしょう。過去と現在、そして未来はどこかでつながっていて、呼応関係にあると理解するのが大事な点だと思います」

「不透明さ」と向き合う力を

授業を通じて学生に身につけてほしい力について、先生は次のように話します。「黙って聞いて、しっかり観察・分析する『アクティブラスニング』のスキルを習得してほしいと思っています。わからなかつたらすぐに答えを尋ねる、というのではなく、まずは自分で咀嚼し、深く考えてみるという姿勢は重要です。例えば、モンタージュから成り立つ映画には、わかりやすいものとそうでないものがあります。わかりやすい例として、スープのショットと無表情な男の顔のショットの組み合わせがあげられます。私たちはそれら2つのショットから、飢餓や空腹という意味を読み取ります。つまり私たちは、日常の経験や既に持っている知識を映像に当てはめることで、わかりやすく解釈しているのです。ところが1920年代から、一見したところなんの因果関係も持ちえないようなショットとショットを連結しようとする試みがなされはじめます。そうした試みは、しかし、映像から意味をそぎ落とすことを目的としているわけではありません。むしろそこには、容易には読み取ることのできない、『不透明な意味』が込められているのです。不透明さが持つ重みや力を、映画制作者は早くから理解して重視していました。不透明さとは、取り除かれねばならないネガティブなものとみなされがちですが、不透明なままでしか知覚できないものはあるはずです。実験映画を見ると、そうしたものに対する感覚が自分自身の内部で研ぎ澄まされていくのに気付くでしょう。学生にはいつも『不透明さとの付き合いを切り捨てないように』と強調しています」

今期はコロナ禍に配慮した授業スタイルが求められましたが、三木先生はどのように対応されたのでしょうか。「対面授業の前の事前学習のために、画像やテキスト資料をPDFで配布するとともに、ラジオ講座のような形で音声解説を配信しました。オンライン学習システムのMoodleやクラウド・コンピューティングなどのテクノロジーと相性良く付き合っていく術が少しずつわかってきた気がします」。学生たちはオンライン授業に順応して



Fig.1——対面授業では大スクリーンで実際の映像を見て考えを深める



Fig.2——遠隔ライブ・対面・遠隔オンデマンドを組み合わせて対応

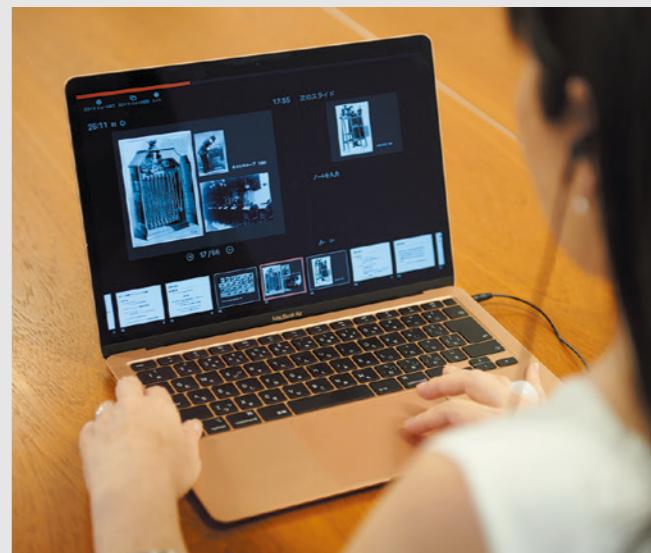


Fig.3——テクノロジーを効果的に活用して学びの質を確保

いると感じつつも、少し心配もあるそうです。「ライブ授業では、学生は、受け取る情報を自然に取捨選択していると思います。しかしオンラインでは、全部を均等に理解しなければならないような気になります。だからこそ、他者の感じ方を思い遣る想像力が大切になってくるように思います。『みんなちがって、みんないい』とよく言われますが、このような多様性とは、あくまでもスタートラインであって、ゴールではないと思っています。違いや多様性を認識した上で、どのように共存していくか。コロナによって差別や分断が引き起こされている今こそ、感性と想像力でもってこの問題に立ち向かっていきべきです」

ポストコロナ時代のキーワード 感性とイマジネーション

三木先生は、写真・映画だけでなく、広く感性や想像力を研究テーマにしています。「感性の

話でいうと、新型コロナウイルスの脅威も人によって感じ方が違いますよね。感性は一律ではないうえに、自分と他者の感性がどの程度違うかを測ることもできません。だからこそ、他者の感じ方を思い遣る想像力が大切になってくるように思います。『みんなちがって、みんないい』とよく言われますが、このような多様性とは、あくまでもスタートラインであって、ゴールではないと思っています。違いや多様性を認識した上で、どのように共存していくか。コロナによって差別や分断が引き起こされている今こそ、感性と想像力でもってこの問題に立ち向かっていきべきです」
「感性や想像力の成熟を助けるのがアートなのだと考えています。アートは自由なものだとみなされがちですが、私はそれはいません。映画にしても、自由な見方を許すというよりは、むしろある見方を強いてくる。重要なのはある見方を強いられることによって、わたしたちははじめて、自分自身の凝り固った見方から解き放たれるという点です。これまでの自分を越えて想像力を自由に羽ばたかせるためには、実は、ある種の強制力が不可欠なのです。その意味で、これまでの自分とは別の見方を次から次へと強いてくる映画は、想像力を解き放つにすごくいいメディアだと言えるでしょう。『写真・映画論』の受講は、映画との新しい付き合い方を見つけ、新たな世界を開きかけになるかもしれません」